様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ２８ 年　 ５ 月 １２ 日現在

機関番号：２４４０３
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2013～2015
課題番号：２５５１１００８

研究課題名（和文）現代イギリス移民系女性アーティストの視覚的表象文化に関する研究

研究課題名（英文）Study of Contemporary Migrant Women Artists in Britain and Their Visual Representation

研究代表者
萩原　弘子（HAGIWARA, Hiroko）

大阪府立大学・人間社会学部・教授

研究者番号：９０１５９０８８

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：移民国家となった現代イギリスにおける移民系女性アーティストの創作、展示等の活動を、1980年代から現在までを対象として研究した。1990年代半ば以前はいわゆる「ブラック・アート運動」の一画を担っていたので、３期に区分したブラック・アート運動の政治的、文化的な流れのなかに彼女たちをブラック・アーティストとして位置づけた。
1990年代半ば以降は、グローバリゼーションの進展と移民出自の多様化もあって、「ブラック・アート」の概念には収まらない別種の動機から創作する者も登場する。それでも移動の経験と周縁化、他者化の経験は共通しており、既存の文化的秩序に対する挑戦を作品に読めることを示した。

研究成果の概要（英文）：The study deals with the visual arts activity of contemporary migrant women artists in Britain, focusing on their producing and exhibiting practices from 1980s up to now. The period before the mid-1990s can be divided into three phases of Black Art Movement. The focused practices are positioned in the political and cultural context of the movement, in which they participated as Black artists.
The following period observed new kinds of migrant women artists, due to a new climate of globalization and more varied background. Their activity is motivated differently from the one in the Black Art Movement period. But my analysis shows their experiences of migration, being peripherized and ‘othered’ are still consistent and their works manifest a challenge to the established cultural order.

研究分野：文化学

キーワード：ジェンダー　ブラック・アート　移民論　視覚表象

１．研究開始当初の背景

（1）カルチュラル・スタディーズの貢献と課題

1980 年代来、イギリス（本報告と発表論文では「英国」と言うこともある）から発信されたカルチュラル・スタディーズの貢献は、人種という社会関係と視覚的表象文化のあいだの政治学を解明した点にある。戦後イギリス移民の２世代目が高等教育を終える 1980 年代には移民系市民の社会的周縁化があらわになり、社会統合政策の不備が顕在化した。労働、教育、政策などの局面における移民系市民の周縁化と社会統合の問題性に関する研究はあったが、文化的周縁化への視点を提起したのが、スチュアート・ホールであり、それに続いたのがポール・ギルロイ、コビナ・マーサーといった研究者であった。彼らの研究は、移動を例外的なものと捉えるのではなく、移動こそは近現代世界を構成する人類的経験と見る点でも注目すべきである。ただし彼らは広く大衆文化を含めて視覚的表象文化を論じることはしたが、ファイン・アートを主たる分析対象とはしていない。また文化的周縁化や他者化を論じても、移民で女性でという立場にある者の経験に主たる関心を置いてはいない。

（2）ジェンダーと芸術表現の研究の貢献と課題

1970 年代に始まったフェミニズム視点の美術史研究は、1980 年代に大きな進展を見せ、主流の美術史を大きく書き換えるまでになった。その動きを先導するグリゼルダ・ポロック、デボラ・チェリーなど、優れた美術史研究者をイギリスは輩出したが、移民系女性アーティストへの関心は薄い。フェミニズムに立つ美術史研究者たちの研究対象は、圧倒的に白人アーティストである。

（3）1980 年代イギリスのブラック・アート運動に関する研究の始まりと課題

移民系アーティスト、特にブラック・アーティストが 1980 年代にした達成についての研究が 21 世紀に入ると出始める。しかしその内容は、文化政策に関する政治学的、社会学的分析が主であって、展覧会の分析や作品の表象分析はなく、またジェンダーゆえの経験に注目する視点も見られない。

（4）「ブラック」という枠組の歴史性を明らかにするという課題

2000 年代以降は、移民系アーティストへの社会的認知が高まり、女性も含めて、モノグラフが刊行され、主要な美術機構の中枢に迎え入れられる者も登場するようになった。「ブラック」というアイデンティティをもたない移民系アーティストも登場する。「ブラック・アート」をめぐる議論が過去のものとなり、1980 年代から 90 年代における「ブラック・アート」という枠組の歴史性を、当時における多義性も含めて明らかにすることが研究の課題となってきた。

（5）日本での研究状況

日本では、イギリス発のカルチュラル・スタディーズ理論への関心は一定程度あるが、移民系アーティストの作品そのものに焦点をあてて、表象文化の既存秩序への挑戦と、移動の意味、そしてフェミニズム思想を論じるという研究はなかった。

（6）これまでの自分の研究との関係

①2009 年度～11 年度に科学研究費助成（基盤研究（C）課題番号 21520153）を受けて行なったのは、1980 年代から 90 年代にかけてイギリス各地で開催された「ブラック・アート」展の動きに焦点をあてた、社会関係と視線をめぐるポリティクスに関する研究であった。そのなかで、現代におけるグローバルな移動と新しい視覚的表象文化の創生に関心を注ぐことは、現代世界を理解するうえで重要であることを確認した。移動は少数の人々の例外的、周縁的経験ではなく、ポストコロニアルの状況における重要な世界現象である。植民地支配は終わった、しかし植民地支配は種々の局面で続いている。ポストコロニアルのこの 2 重状況において、移動はかなりの規模で常時行なわれ、移動先では文化的変容が起こっている。これまでの研究で一定程度それを示すことができた。

②研究を進めるなかで、女性アーティストに関する評論や研究が少ないことに気づき、焦点化する必要を考えるに至った。女性であるがゆえにとりくむ表現テーマがあることも見逃せないと知った。また 2000 年代に入ると、イギリスで活動する移民系アーティストのなかにムスリム・アイデンティティを表明する者が増え、かつて移民の連帯を意味した「ブラック」の語は過去のものとなり、新しい文化的他者がいる状況を見る必要があるとも考えるようになった。

以上のような研究状況のなかで、現代の移民系女性アーティストの創作活動の意味を、移動の経験と関連づけて視覚的表象文化とフェミニズム思想の歴史に位置づける研究に着手するに至った。

２．研究の目的

現代イギリスの視覚芸術領域で活動する、旧植民地、第３世界からの移民に出自をもつ女性アーティストの創作に焦点をあて、写真を含むファイン・アートという表象文化と社会関係（移民、人種、ジェンダー、階級）、そして移動（migration）という行為との関連性を明らかにするカルチュラル・スタディーズ研究を行なう。それにより次の点を明らかにしたい。（１）芸術的な表象文化に作り手として参加する権利が平等に分配されていないなかで移民系女性アーティストとい

う社会的位置から創作を続けることが、既存の文化的秩序に対するどのような挑戦になっているか。（２）移民、女性、文化的他者と、幾重にも周縁化された位置での創作活動が白人女性によるフェミニズム運動・思想に対するどのような挑戦になっているか。

３．研究の方法

上記の目的を果たすために、本研究は次のような方法によった。

（１）1980～90 年代に開催されたブラック・アーティスト作品展の図録、展覧会評、参加した女性アーティストの作品評、モノグラフおよび関連論考の系統的収集と、その分析、考察。

（２）1990 年代半ば以降に作品を発表するようになった新世代の移民系女性アーティストの展覧会評、作品評、モノグラフおよび関連論考の収集と、その分析、考察。

（３）1980 年代半ば以降に始まるブラックのための美術機構、創刊される美術関連雑誌に関わる資料の収集と、その分析、考察。たとえば、機構としては「女性アーティスト・スライド資料館（Women Artists Slide Library：WASL）」や「視覚芸術協会（Organisation for Visual Arts)」、雑誌としては Women Artists Slide Library Journal, Third Text, Bazaar。

（４）「英国芸術評議会（Arts Council of Great Britain)」の女性・移民政策に関連の資料の収集と、その分析、考察。

（５）主流美術館の常設展、コレクション展での資料収集と、その分析、考察。

（６）女性アーティストへのインタヴュー。実施したのは、ムスリム・アイデンティティ、イスラム・文化への言及がある作品をつくるアーティストと、上記に挙げた WASL で働いていたアーティストほか、５件。

資料収集とインタヴューは、３度の訪英で行なった。分析、考察のための基盤としたのは、社会関係をつくりだす現場としての美術作品という、カルチュラル・スタディーズと美術史研究が新しく提唱してきた視点である。また言説資料の分析、考察は、イデオロギーの構成と機能に注目する思想史的方法によった。

４．研究成果

大きく分けて（１）～（６）について研究し、次の諸点を明らかにした。

（１）対象とする 1980～90 年代半ばまでの約 15 年間の時代区分について

①視覚芸術領域における移民系アーティストの活動を研究するに際して、彼らの展覧会が集中的に開催された 15 年間を３期に分けた。第１期（1980 年代前半）は、アーティストたちが美術機構の現状に対する批判的視点に立って、強い主体性をもって「ブラック・アート」を言挙げした時代である。第２期（1980 年代半ば～80 年代末）は、地方行政府といくつかの美術館による助成によって、多くのブラック・アーティスト総覧展が開催された時代である。第３期（1990 年代前半）は、文化的多様性を掲げる英国芸術評議会が主たる助成者となり、総覧展に替わって多くのテーマ展が開催された時代である。このうち第３期の研究は部分的に留まった。

②３期のうち、第１期と第２期にあたる 1980 年からの 10 年間に開催されたブラック・アーティスト作品展は、記録のあるものだけで 47 展、そのうち参加したアーティスト名がはっきりしている 20 展の参加人数延べ 325 人、うち女性 106 人である。１人が複数の展覧会に参加している場合もあり、顔ぶれとしては延べ人数の約半数が関与した。第３期に開催の、ブラック・アーティストだけが参加したテーマ展の数は５年間で 60 を越え、その数から第２期までとは違う状況になったことがわかる。

（２）1980 年代前半の「ブラック・アート」言挙げの時期における「ブラック・アート」論と女性アーティスト展について

①白人中心的な美術機構の変革と、芸術の変革を主張して始まったブラック・アート運動のなかにも女性はいた。女性アーティストたちは、同時期に開催されたブラック女性だけの展覧会にも参加していた。当初からブラックで女性でという自身の社会的位置と周縁化の関係に意識的で、それを共有する者たちとの共闘があった。当時「ブラック・アート」と言えば、担い手をアフリカ系、アフロ・カリビアン系に限るとする立場が主だった。ただし女性アーティストは、「ブラック・アート」をめぐる論争には参加せず、むしろアフリカ系、アフロ・カリビアン系と、南アジア系のアーティストたちとの具体的連帯の形成を重視した。しかしどんな立場であっても、アーティストの多くは、「ブラック」を出身地やエスニシティと結びついた概念とは捉えず、芸術の既存秩序に対する批判的立場を意味するという考え方を支持していた。

②ブラック女性アーティストたちがとりくんだ創作テーマに、女性の外見、ステロタイプ、西洋美術のなかのブラック・イメージがある。名前を挙げれば、スタパ・ビスワス、ルベイナ・ヒミド、ソニア・ボイスといったアーティストである。彼らの作品には、見られる対象物としての女性という女性像への挑戦、西洋絵画に描かれてきたブラック女性像への批判を読むことができる。描かれた女性像についての批判的研究は 1970 年代以来のフェミニスト美術史学で多くのとりくみがあるが、女性といえば白人女性を意味した。上記アーティストたちの仕事は、白人女性が「女性一般」を代表することへの抵抗を含意している。

（3）1980 年代半ばにおける地方行政府、主流美術館によるブラック・アーティスト総覧展について

①労働党が力をもつ、ロンドンを初めとする地方行政府の文化政策のおかげで、いくつもの展覧会が開催された。主流美術館が企画、開催したブラック・アーティスト作品展もあった。1984 年から 86 年の３年間に開催されたそれらの展覧会のうち、図録等の記録の残っている８展に参加したアーティストは延べ 168 人、うち女性が 39 人である。結果としてブラック・アーティストたちの可視性は全般に高まったものの、開催者、助成者のつくった「エスニック・アート」という枠組に押しこめられることにもなった。この時期の展覧会は、各人の代表作数点を集めたブラック・アーティスト総覧展という形式に限られた。そこから個展やテーマ展の開催に繋がることはなく、彼らは常に集団として扱われた。「ブラック・アート」は「エスニック・アート」の言い換えという程度の意味で響くようになった。

②総覧展が続くなかで、ブラック・アーティストはエスニックな存在として、別枠に置かれた。その人種分離主義のせいで、彼らは現代アートに参加していないと見られ、アーティストたちはその傾向に批判的に対峙するようになった。

（4）1980 年代後半におけるブラック・アート論争と女性アーティスト展について

①1980 年代半ばの地方行政府といくつかの美術館によるブラック・アーティスト総覧展の問題点が明らかになり、それに対する抵抗が表明されるようになったのが 1980 年代後半である。アーティスト主導で企画した、「ブラック・アート」をタイトルに掲げる３つの展覧会には、人種分離主義への批判、エスニック化と周縁化への批判がはっきりと示されている。これらは「抵抗のブラック・アート展」と位置づけることができる。

②そうした展覧会を企画した１人であるエディ・チェンバースと、1970 年代から「ブラック」を政治的立場として使うことを主張してきたラシード・アリーンのあいだで交わされたブラック・アート論争は、1980 年代末における当事者によるブラック・アート言説の成立として重要である。

③同じく 1980 年代後半には、スチュアート・ホールもまた精力的にブラックによる芸術表現を論じ、なかでも写真に関する評論をいくつも発表している。ブラック・アートの多様性を言い、均質で一様の本質的なブラック主体などないと否定するアーティストたちの見解に、ホールの影響を見るのが一般的である。しかし 1980 年代におけるブラック・アート運動の流れと、運動へのホールの関与を研究すれば、そのまちがいは明らかだ。むしろホールのほうが、ブラック・アート運動に出会うなかで、ブラック・アートの多様性とブラック主体の非本質性という見解を獲得したと言うべきである。

④行政や美術館に主導権を握られることのない、オールタナティヴな展示や発表のルートを求める動きが始まった。女性アーティストのリーダー的存在であったルベイナ・ヒミドが、1980 年代末に女性のための展示スペースを開き、出版社を起こしたのもそうした動きのひとつであった。

⑤女性アーティストは、ブラック・アートの言説の追究には関与しなかった。むしろ、ブラックでも移民系でもない女性アーティストたちとともにテーマ展を開催し、人種分離の壁を打破することに力を注いだ。

（5）英国芸術評議会と多文化主義について

①1986 年に英国芸術評議会（以下、芸術評議会）が発表した「エスニック・マイノリティ・アート行動計画」は、芸術評議会が初めてブラック・アーティストの支援について策定した行動計画である。しかしそれは実行の組織体も整わない不備なもので、ブラック・アーティスト諸団体から厳しく批判された。批判を聞き入れて、体制を整え、ブラック・アーティストであるガヴィン・ジェンティスが初の評議員となり、行動計画の実施状況をモニタリングする委員会もできた。そのモニタリング委員会が 1988 年に出した報告は、行動計画の言う「エスニック・マイノリティ」という枠組に替わるものとして多文化主義、文化多様性をうちだし、1990 年代における芸術評議会の変化に繋がっていく。

②多文化主義を基本的思想に据えた 1990 年代以降の芸術評議会の政策にあっては、「ブラック・アート」は多様性のなかの差異の１つとなった。グローバリゼーションの新局面が展開するこの時期、英国で政治的、文化的な他者化に直面する新来移民は、たとえば「ブラック」のアイデンティティをもたないアフリカ系（ソマリ人など）、ムスリム・アイデンティティに立つ中東からの移民、中東の少数者であるクルド人である。彼らに対する社会的排除をブラックの問題として論じることは難しい。「ブラック」が英国における移民に関する分析枠として中心的なものでなくなり、「ブラック・アート」の社会的意味も変化したと言える。

③移民系女性アーティストが展示などの活動をする際に、多文化主義や文化的多様性を共有思想として連帯することは起こっていない。単に「移民」であることだけを連帯の基盤とすることも現実にはない。翻って 1980 年代のブラック・アート運動を見れば、奴隷制、植民地支配、戦後英国の移民奨励策といった歴史経験の共有があってこそ形成されたとわかる。

④芸術評議会の予算で 1994 年に創設の新国際視覚芸術機構（Institute of New International Visual Arts）は、多文化主義に立つ国際レヴェルの芸術交流のための

組織である。それまでの議論百出の状況を踏まえて、組織の名称に「ブラック」の語は掲げなかったが、ブラック・アート運動がなければその創設はありえなかった。すでに創設から 20 年が経つが、その活動の意味と評価は、今後の研究の課題である。

（6）移民系女性アーティストの作品に見る場所と空間のテーマについて

①文化的、人種的他者と扱われる立場で創作するアーティストにとって、場所、風景、描かれた絵画空間が含意する排除や敵意は重要なテーマである。風景の人種的排除性について論じる文化研究はあったが、そうしたテーマで創作する女性アーティストに焦点をあてる論考は英国でもこれまでなかった。

②場所と空間のテーマで創作する女性アーティストから６人を選んで、その作品の表象分析を行なった。彼らの活動開始時期は、第１期から第３期までさまざまである。また、ブラック・アイデンティティを重視する者も、そうでない者もいる。共通しているのは、彼らの作品が、文化的、人種的な他者性に加えて、女性という他者性にも言及した表現である点だ。たとえば、英国に入国する南アジア女性だけに課せられた処女膜チェックへの言及、生活用品である石鹸の使用、シンデレラ物語をベースにした作品世界の構築、ピカソが描いた性的女性像への対抗的女性像の制作などである。これまで女性学、ジェンダー研究で議論されてきた「女性性」が白人中心的で、そこでは言及のなかった「女性性」の問題もあることを示す表現ともなっている。

③場所、風景、絵画空間を見る人々の視線に異化作用を起こすような作品づくりをしている点が共通している。たとえば広く流通している「英国的田園風景」の図像がある。それは人々の視線に「英国的」風景を教えるように働いており、そのためその風景はナショナルな意味を帯び、そこに相応しい者とそうでない者を選別する機能をもつ。構築されたナショナルな風景の図像をあるがままの自然と見るように教えられた従順な視線を異化し、他者化された側から見る場所や風景の意味を視覚イメージにした作品群は、移民系女性アーティストの大きな達成である。

④彼女たちの作品は、それを展示する場所と一体である点でも共通している。つまり展示の場所、展示の方法も作品の一部としている。それらの作品にとって、展示は、そこに新しい独自の空間を構築する行為であり、展示場所が違えば、別の作品となる。たとえば、額装作品の下方の床にスパイス粉を置いたザリナ・ビムジのインスタレーション作品である。あるいは、作品がその意味を発揮する特定の場所を選んでの展示に限る場合もある。たとえば、オスロ合意で決められたパレスチナ地図を石鹸でつくり、エルサレムの中心街で展示したモナ・ハトゥームの作品である。

⑤そうした創作活動を生みだしたのは、彼女たちの、戻れない移動という経験である。移動の理由は、アーティストによってさまざまで、戦後英国の移民奨励策時代に親に連れられて移動してきた者、政治的理由で出奔してきた者、あるいは帰還を阻まれた者など一様ではない。彼らの作品を、その出身の文化的伝統から評論するのは的外れであり、戻れない移動の結果、英国で創作しているというところに現代アートとして重要な意味がある。

以上で、先に「研究の目的」で挙げた２点について明らかにした。ただし上記（５）についての論考は未完であり、今後発表の予定である。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕（計６　件）

①萩原　弘子、1980 年代末、抵抗としてのブラック・アート展、人間科学、査読無、11 号、2016 年 3 月、3－24 頁、
http://hdl.handle.net/10466/14891

②萩原　弘子、排除する風景、書き換えられる地図―英国ブラック・女性アーティストの作品に見る場所と空間、人文学論集、査読無、34 集、1－26 頁。
http://hdl.handle.net/10466/14926

③萩原　弘子、1980 年代ＧＬＣの文化政策と「ブラック・アート」、人間科学、査読無、10 号、2015 年 3 月、3－29 頁、
http://hdl.handle.net/10466/14436

④萩原　弘子、主流美術館によるブラック・アーティスト総覧展、人文学論集、査読無、33 集、2015 年 3 月、83－109 頁、
http://hdl.handle.net/10466/14348

⑤萩原　弘子、スチュアート・ホールと 1980 年代英国ブラック・アート運動、黒人研究、査読有、84 号、2015 年 3 月、25－34 頁。

⑥萩原　弘子、言挙げの時代をふりかえる―英国「ブラック・アート」の軌跡（１）、人文学論集、査読無、32 集、2014 年３月、1－21 頁。

〔学会発表〕（計　１件）

①萩原弘子、1980‐90 年代英国ブラック・アート運動とスチュアート・ホール、黒人研究の会、2014 年 6 月 28 日、キャンパス・プラザ京都（京都府京都市）。

６．研究組織

(1)研究代表者

萩原　弘子　（HAGIWARA, Hiroko）
大阪府立大学人間社会学部・教授
研究者番号：90159088

(2)研究分担者　なし

(3)連携研究者　なし